キャラクター名
沈澤 燈眞(シズサワ トウマ)

プレイヤー名

シンドローム	ブラックドッグ キュマイラ	ワークス	UGNエージェントA	カヴァー	UGNエージェント
オプショナル		年齢	35	性別	男
覚醒	償い	衝動	吸血	初期侵食率	40 %
出自	親の理解	経験	大失態	邂逅	同僚

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	5	1	0	2		8
感覚	1	0	0			1
精神	1	0	0			1
社会	1	0	0			1

HP	37
行動値	3
(非装備時)	3
戦闘移動	8
全力移動	16

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	6		射撃			ＲＣ	1		交渉		
回避	1		知覚			意志		1	調達	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
フォールンアックス	白兵	10r+5	2	10		ダメージダイス3個まで振り直し、侵蝕+2
↑ウェポンケース						

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

コネ：UGN幹部	
沈澤隊の部隊章（思い出の一品）	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
秘密兵器	P	N		
浮瀬朋也（BL）ｳｷｾ ﾄﾓﾔﾘ	P 有為	N 悔悟		
久木静流（GR）	P 連帯感	N 劣等感		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 4	残り財産P： 0

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
加速装置	3	2	セット	至近	自身	自動	-	
効果：ラウンド間【行動値】+[LV*4]								
ヴァジュラ	3	3	セット	至近	自身	自動	ﾘﾐｯﾄ	
効果：シーン間攻撃力+[LV*3]、暴走								
コンセ：ブラックドッグ	2	2	メジャー	-	-	-	-	
効果：C値-[LV](下限7)								
スパークウェッジ	5	2	メジャー	武器	単体	対決	-	
効果：HPダメージ後自身以外を対象に含んだ攻撃をした場合[LV*3]のHPダメージ								
復讐の刃	2	6	オート	至近	単体	対決	-	
効果：リアクション放棄で反撃、C値-[LV](下限7)								
血染めの獣	2	4	オート	至近	自身	自動	120	
効果：HPダメージ後シーン間白兵攻撃力+10、[LV]回/シナリオ、3回まで重複								
鋭敏感覚	★	-	メジャー	-	-	-	-	
効果：獣の知覚で周囲の状況変化を察知する								
獣の直感	★	-	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果：獣の知覚で天候の変動を察知する								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

名実共にUGN最強の戦闘部隊と名高いストライクハウンドの日本支部にて、隊長を任された経歴もある青年。
現在は第1特務小隊・久木隊の副隊長という立場に落ち着き、その一番槍ならぬ一番斧としての役割を務めている。

そもそも彼は隊を率いるのに向いた性格ではなく、戦闘スタイルも早駆けで最前線を蹴散らし相手のペースを乱す型のため、彼の後を任される部下たちはよく苦労していたようだが、隊内の雰囲気は非常に良く、彼自身もとても慕われていたという。
そんな彼が隊長に任命されたのは、2年前のとある討伐任務の後の話だ。当時隊長だった青年が脱隊したことで繰り上がって昇任している。その任務において、命こそ無事ではあったが隊員達が失うものは多かった。正常な判断力、自身の腕……そして、彼自身も大きく変わった。
当時副隊長であった彼は、最前線での指揮を指執っていた。彼の隣に立っていたのは重浪という、このストライクハウンドという組織の将来を任されてもおかしくない、判断力・戦闘力共に優れた部下だった。
彼が相討ち覚悟で討伐対象と戦い、そして利き腕の右腕を失うこととなる。その決断をしたのは隣で戦った自分が力足らずだったと悔いている。
そして一歩下がったところから指揮を執った隊長の軽部は大きく精神を病み、ストライクハウンドを辞した。この結果、繰り上がりで隊長の階級まで昇任することとなったのだった。
当時後方で支援していた浮瀬を副隊長として、隠密行動を得意とする上遠野も迎え、他の隊員を含めて中隊規模で沈澤隊は構成される。
彼は最前線で戦うことで、後方にいる部下を守ろうとした。

しかしその決して振り返らない戦闘スタイルが仇となり、彼は後ろをついてくる部下を喪うのだった。
ある日、振り返った彼の背後にあったのは、屍の山と、手遅れの化物だった。その戦場は自身が終わりを告げさせた骸だけが、積み重なっていた。
しかし彼の歩んだ道が赫に染まっているのはこの日だけではない。全滅とまでは及ばないものの、立て直しが困難な状況に陥ることもしばしばあって、その細い危険な道を常に歩んでいた。
それを堕ちぬように上手くコントロールしていたのが部下としての経験も長い副隊長の浮瀬だった。彼が一番に墜ちたことが部隊にとって大打撃となったのは、言うまでもないだろう。
次席の上遠野は単独任務が降りてくることも多く、いつか崩壊することを恐らく理解した上でも無言を貫いていたことを考えると、前の部隊から連れてくるべき